

異民族の目に残された歴史の記憶

——日本語ガイド・ブックに記録された 旧満洲の建造物・装飾物を中心として

趙 軍

1932年に日本の関東軍が中国の東北地方（旧満洲）を武力占領し、傀儡国家である「満洲国」を建てた後、この地域は擬制の「五族協和」（日・漢・満・蒙・鮮）というスローガンの下で、多民族混同居住の15年間を経た。その間、社会の激しい変動や植民地当局の政策により、多くの民族的・伝統的文化が徐々に近代的・植民地的文化に取って代われ、姿を消しつつあった。

戦後とりわけ1960年代に始まった10年間の「文化大革命」による破壊と1980年代後期から始まった「改革・開放」の時代がもたらした広範囲に及ぶ社会変動や辺鄙な農村地域までに広げた再開発の波によって、より多くの伝統文化のキャリア（担体）がさらに消えた。ごく一部の代表的な史跡などは「文化財」として現地や博物館に保存されることになったが、一般民衆の「日常」生活を窺えるキャリアの数々はほとんど残されていない。

1930～40年代の中国東北地方の庶民レベルの生活環境と様相を復元するには、資料などの歴史記録は重要な手段となる。その意味で、この時期の前後に日本語で編著・出版されたガイド・ブック類（ここでは案内書・地図集などもガイド・ブック類に準ずる出版物と見なす）などの出版物は、貴重な参考資料の一つになる。

満洲旅行関連のガイド・ブックの数が多く、同じ出版元からは同じタイトルで数年間隔で新しいバージョン（例えば満鉄鉄道総局から出版された『新京』『大連』などのシリーズ）を出版され続けるケースもあり、当時の都市変遷・生活環境の変化などを把握するためには、参考価値が高い。

この小論は主に以下の数種類の資料に基づいて考察を行った⁽¹⁾。

- 1) 藤田勘一『観光叢書第9輯 満洲の家』満鉄鉄道総局営業局旅客課昭和十四年十月発行。（以下、『満洲の家』と略す）
- 2) 松宮吉郎『新京』満鉄鉄道総局営業局旅客課昭和十二年六月発行。（以下、松宮吉郎『新京』と略す）
- 3) 奉天鉄道局『新京』奉天鉄道局旅客係昭和十四年八月発行。（以下、奉天鉄道局『新京』と略す）
- 4) 伊與三郎『満洲の観光バス案内』大連都市交通株式会社・奉天交通株式会社・新京交通株式会社・哈爾濱交通株式会社昭和十四年一月共同発行。（以下、『満洲の観光バス案内』と略す）
- 5) 満洲事情案内所編『満洲生活案内』満洲事情案内所報告（77）、満洲事情案内所康

(1) 小論で利用されたガイド・ブックの多くは、故滋賀大学経済学部教授中馬太一先生が蒐集したもので、先生のご遺族のご厚意で提供された。ここに記して感謝の意を表す。



図1 日本語による満洲関連のガイド・ブックの数々 その1



図2 日本語による満洲関連のガイド・ブックの数々 その2

徳七年四月発行。(以下、『満洲生活案内』と略す)

- 6) 『満洲旅行の栞 昭和十年版』南満洲鉄道株式会社昭和十年四月発行。(以下、『満洲旅行の栞』と略す)

旧満洲関連のガイド・ブックの種類が多さから見れば、当時の日本本土にとって、「満洲」旅行は非常に人気の高いツアーだろうと推測できる。そこには異文化・異民族的な生活地域のため新しい発見や珍しい見聞を得られる「旅の楽しさ」的な要因も多数含まれていたことはもちろんだが、政治的な理由も当然含まれている。例えば、『満洲の観光バス案内』の冒頭では、

「満洲ほど強く旅行者を引付ける土地は無いでせう。それは我が日本の進路に対して偉大な回答を与えてゐる土地だからです。豊饒な曠野，安らかな民心，そこに火と燃える五族協和の精神，皆日本人として見なければならぬ，知らなければならぬ事柄ばかりです。

『先づ満洲を知れ』

日露戦役の跡生々しい旅順戦跡，大陸の大玄関大連市，満洲の心臓奉天，炭都撫順，国都新京，北満のモスコウ哈爾濱，これ等の都市には観光バスが運行されております」と述べられ，満洲旅行の高い人気の裏に政治的な理由が存在すると指摘されていた⁽²⁾。つまり，文化的探検への好奇心のほか，征服された植民地に対する満足感，征服者としての優越感をも味わう旅行の一つは「満洲ツアー」であった。この征服者としての異民族の目にどのような歴史的記憶が残されているだろうか？現在すでに消失しつつある歴史的建造物とすでに通用・流行していない装飾物を中心として，整理していきたい。

一、歴史的・地域的な建造物

中国東北地方の1930～40年代は動乱続発の時代であり，漢民族・朝鮮族・日本人移民が争って農業開墾・開発を行う時代でもあった。ここでは，さまざまな歴史的・地域的な特

(2) 伊與三郎『満洲の観光バス案内』1頁。

徴を持つ建造物が建てられた。

礮臺（砲台）

「満鉄沿線の一寸大きな農家の土塀ママの偶にお城の櫓のやうに物々しく高く築いた建物がある。これは『礮臺』と云ふ匪賊に対する望楼でありトーチカである。ところどころに銃眼があるから一見してすぐそれが判る。農家ばかりでなく田舎の町では大きな商家や富豪の住宅でも数個の礮臺がある。

この満洲の何処に、こんなものを築かねばならないやうな匪賊がゐるのかと疑ふであらうけれど、支那、満洲には古来賊団の跡を絶たず、人民は常にその襲撃を受けて略奪を受けた。それで民家ばかりでなく一寸した民家の集落にはそれを囲らす土塀があり、街は城壁で囲んである。礮臺はないまでも民家はそれぞれ高い墻壁を廻らし、家屋の窓を頑丈に造つてあるのは、その匪賊を防ぐ目的である。満州事変前、特にひどかつたのはその直後であつた。あの時代の治安状態を知る人はこの民家の礮臺の存在価値を無視することはできないであらう。

この古風な礮臺が、農家にとっては自己防禦の最上且つ最後の砦であつた」⁽³⁾。

「礮（砲）」という用語は大砲を指す場合もあれば、小銃・拳銃を指す場合もある。匪賊を相手にする東北地方の「礮臺」は、主に小銃・拳銃を使うための防禦工事である。中国の東北地方では清朝の末期から「馬賊」と呼ばれる匪賊のたぐいが横行し、略奪、誘拐、強盗などの手段を通して富を集め、治安を悪化させた。馬賊のメンバーはみな馬に乗って行動し、軍閥や日本軍からの武器補給を得られ、戦闘力の高い強盗集団であつた。「当時東北各地遍布馬賊、各路馬賊互不統領、各自為戦、小股数十人、大股多者竟至万人。光緒末年東北著名馬賊、有唐殿榮、燕子、劉彈子、十四閻王等（当時の東北各地には馬賊が至る所におり、馬賊のグループの間に統率関係がなく、それぞれの戦いをし、小さなグループが数十人、大きなグループは一万人を超えることもある。光緒末年に東北で最も著名な馬賊のリーダーの中に、唐殿榮、燕子、劉彈子、十四閻王等がいた）」⁽⁴⁾。そして、日露戦争後、「博天鬼（博益三）」、「小白龍（小日向白朗）」、「張宗援（伊達順之助）」等の日本浪人も馬賊に入って、社会秩序の攪乱から日中関係のトラブルを引き起こすまで、さまざまな悪事に手を染めた。馬賊の略奪の対象は各地方の大地主・高級官吏・大商人・高利貸し商人に集中するため、当時の富豪達は住居の周りに高い塀を築き、「礮臺」まで造って防備せざるを得なかつた。

ほかの資料では、「礮臺」を「望楼」という名称で紹介されていた。「方位は極めて重要視される農家では一棟乃至数棟が一戸をなし、必ず土牆又は石牆で囲み、門を設け、中には院子（庭）がある。牆壁は匪賊を防ぐため堅固で大邸宅になると四隅に望楼があり、銃



図2 砲台

(3) 藤田勘一『満洲の家』7頁。挿絵は同書の8頁より引用。

(4) 袁燦興「近代日本在華馬賊」『文史天地』2012年第4期 (<http://www.yantan.cc/bbs/viewthread.php?tid=113692&page=1>, 2014年1月20日)。

眼さへ設置されてゐる。』⁽⁵⁾名称こそ違つたが「銃眼」が設置されること、即ち防禦工事として建てられたこの建物の目的は「礮臺」と同様であつた。言うまでもなく、馬賊が滅びたあと、このような建物は徐々に姿を消していった。

さまざまな倉庫

農村地帯の倉庫（蔵）は、天候など地域的な特徴に合致することを重視する建造物であるため、実用性と防災の性能を思う存分に発揮したほか、ユニークな形をするものも多い。当時の旧満洲地方では、以下のような倉庫が見かけられていた。

・円形倉庫

これは当時四平街からチチハル方向に向かう鉄道沿線によく見かけるユニークな形をした倉庫である。著者の紹介によれば、円形倉庫は「古代エジプトの絵を見るやうな丸い形をした望楼とも家屋ともつかない粘土の建物」で、「屋根は粘土もあるが藁や茅で葺き円錐形になつてをり壁は粘土で塗り固めてある」⁽⁶⁾。そして、このような円形倉庫は特に四平街、洮南、鄭家屯、泰来など内モンゴルと接しているところに多いと言われている。



図4 円形倉庫

このような円形倉庫の由来について、著者は地元社会に対する観察から、恐らく「蒙古人が水草を追ふ純遊牧生活から、半農半牧の生活に移つて、住宅も又形式を変へ、移動式包（ゲル——引用者）が固定式包になつたのであるが、倉庫も同じやうに周囲に粘土を塗つて固定せしめなければならなくなつた。かうして遊牧から定住への過渡期の有様が、遊牧民の文化圏と、定住民の文化圏との接触する、平斉線（四平街～チチハル線）の沿線に現れてゐる」ものだろうと推測した⁽⁷⁾。

・高脚倉庫（高倉）

高脚とは高い足のこと、挿絵から見れば、4本の高い足の上に乗せた木造の小型建物である。このような倉庫は安奉線（安東（現・丹東）～奉天（現・瀋陽））沿線によく見かける。高脚倉庫（高倉）のほとんどは切妻式茅葺きの屋根だが、その主な用途は穀物を備蓄するためのものと著者は説明している。

高脚倉庫の分布地域について、著者は「北満地方にも沢山見受ける」「これは満洲民族の考案したものらしく又黒龍江に住み民族の間には幾分ロシア化してはゐるけれどこの高倉が非常に多い」と指摘していた⁽⁸⁾。ここで紹介された高脚倉庫は、中国では恐らく現存していない。一部の文字記録には、高脚倉庫はオロチョン族という少数民族の特有な原始的建物で、「奥倫」と呼ばれ、干し肉・食料と普段使わない用品を貯蔵する倉庫であり、

(5) 『満洲生活案内』10頁。

(6) 『満洲の家』8頁、挿絵は同書9頁より引用。

(7) 『満洲の家』8～9頁、挿絵は同書9頁より引用。

(8) 『満洲の家』9～10頁、挿絵は同書10頁より引用。



図5 高脚倉庫

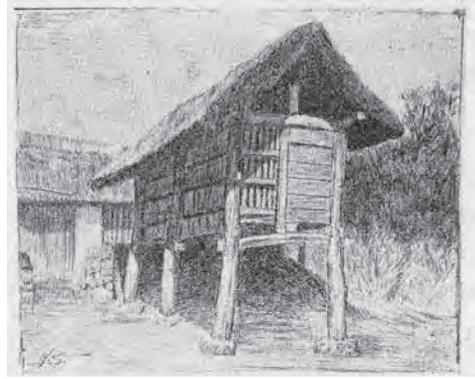


図6 高脚倉庫

遊牧生活から定住生活に変えてから、「奥倫」は次第に消失したという⁽⁹⁾。

・板倉

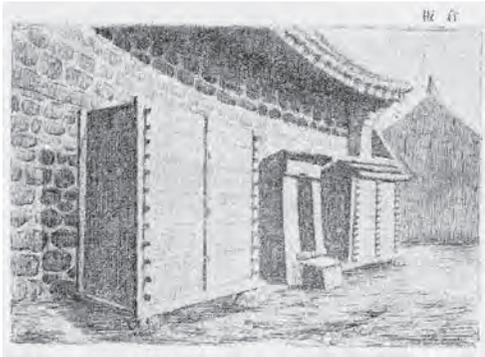


図7 板倉

板倉の挿絵を見る限り、現代日本の民家によく見かける物置に近い住居設備と言える。ただし、板倉の主な用途は、やはり穀物の貯蔵らしい。「三江省や牡丹江省には板製の穀倉もある、細長い四角な板の箱を重ねたものであるが、原始的な手際は一寸面白いものである。この板倉は普通庭の隅にあるが、家によつては屋根のある小屋の中に設けたところもある」⁽¹⁰⁾。板倉は上述したほかの倉庫と違って、独立した建物ではないものが多いため、依存している建物が取り壊されると一緒に消失する性格から考えると、現存する可能性は極めて低いと考えられる。

二、少数民族の住居とその特徴

中国の東北地方は本来、複数の民族が交えて暮らしている地域であり、清朝の中期以降、朝鮮半島から朝鮮人の移住やロシア革命以降ロシア人（「白俄（白系ロシア人）」）の移住も盛んになり、その民族的多様性はさらに豊かなものになってきた。そのため、各民族の伝統的住居や生活習慣も一斉にこの地域に現れ、「極東のロシア、極東のモスクワ」と呼ばれるハルビンのような異国情緒の充満する町が出現したばかりではなく、広々した農村地帯においても諸民族のそれぞれの伝統と文化に基づいた建物や生活施設が現れた。

(9) 「鄂倫春族的居室環境」(<http://hlbe.nmgnews.com.cn/system/2007/06/12/010000364.shtml>)、2014年1月18日。

(10) 『満洲の家』11頁、挿絵は同書11頁より引用。

当時の日本人の目にも、「満洲の民家は民族によつて建築の様式を異にしている。そして之等の様式を混淆したのもある。近来は露西亜人の伝えた欧風の住居の他、日本人の和洋折衷した家屋、朝鮮移民がもたらした朝鮮風の家もある」という印象が残され、旧満洲では住宅の面においても変わりつつある状態だったと窺える⁽¹¹⁾。

満洲族の民族的住居とその特徴

満洲族の住居の分布について、1930～40年代において、すでに限られた地域にしか見られなかったという。「満洲族系の家屋は支那系家屋の影響によつてその特徴が殆んど見受けられない。僅かに牡丹江流域の東京城附近や黒龍江流域の瑯琿附近、延吉その他の極く限られた処に純満洲系家屋が残る。」⁽¹²⁾

そして、満洲族住居の構造面の特徴として、『満洲生活案内』には、「敷地全部に牆壁を囲らしてあることや門は正面中央に付け略々左右均齊の方式に扨り、正房が南面して居ることは同じである。主な相違点は鳥居式の門で庭の中央に影壁があり、その門に面した方には秫槽があり、庭の方には満洲民族住宅独特の天地の神を祭る標式である神竿が立て、ある」と紹介されている⁽¹³⁾。『満洲の家』の中にも、「門は鳥居式の門で庭、の中の附属建物は屋敷の東側に西向に建て、主として農具や穀物の倉庫としてある。鶏小屋や豚小屋はこれに附接して居り、庭の中央には影壁があり、その前に秫槽等があり、その脊〔背?—引用者〕後に満洲民族住宅独特の神竿（索倫杆子とも云ふ）を立て、ある。……神竿に種々あるが、かならず碗形のうけがつき神に供えた豚の足の骨を杆の頂上に挿すことが方式とされてある。」⁽¹⁴⁾

室内のレイアウトや装飾などに関して、祖先崇拜と尚武的な伝統が目立ったという。

「室内の模様は大体漢民族の模倣が多く、特に変わつているのは、炕（オンドル、「温突」とも呼ばれる——引用者）が室の三方に設けられてあることがある。……壁の上に二つの祖宗匣が置いてある。祖宗匣の一つは主人の祖宗を、他の一つは主婦の祖先を祀るもので、この母系祖の祭祀をすることは満洲民族の特色である。祖宗は匣の側に刀や矢を飾つてあるところもあり、満洲族の尚武の風を偲ぶに足る遺風である」⁽¹⁵⁾。

さらに、当時の国境近くにある「変形」された満洲族の住居の実例も紹介されている。「純満洲民族ではなくとも東部国境には第十四図〔筆者注：図8の「煙突の家」である〕にあるやうな切妻式の藁葺きの民



図8 煙突の家

(11) 『満洲生活案内』9頁。

(12) 『満洲生活案内』10頁。

(13) 『満洲生活案内』10頁。

(14) 『満洲の家』25頁。

(15) 『満洲の家』25頁。

家をよく見受ける、これにはまるで煙突の家とでも云ひたいぐらひの大きな煙突が目につく、下方の直径は約一米位で、丁度日本の銚子の様な形をしてゐる、上になるほど細い。この煙突の中には四枚の板を四角に組み合せたものとか、一本の大きな木の中をくり抜いて筒としたのを煙道として嵌めてあり、その周囲に外観通りの粘土を塗り固めてある。満洲語でこれを摩訶郎マカラン又は呼蘭ホランと言つたものであるから、現今もこの造り方を伝えてゐるわけである」⁽¹⁶⁾。

上述した紹介は実際、現在の民俗学者たちの資料調査やフィールド調査の結果とだいたい合致している⁽¹⁷⁾。例えば、

「満洲族の住房、過去一般院内有一影壁、立有供神用的“索伦杆”。満洲族传统住房一般为西，中，东三间，大门朝南开，西间称西上屋，中间称堂屋，东间称东下屋。西上屋设南，西，北三面炕。……他们以西炕为尊，南炕为大，北炕为小。南炕居长辈老人，北炕住小辈；西炕则为祖宗神位，墙上供着祖先神板，炕上设摆香案，一般不住人，最忌小辈和妇女坐，只有老人与亲姑爷可以坐。満洲族房舍的南北西三面，“皆辟大窗户”，且分上下两层，窗棂以万字或工字为格，窗外糊纸，开关朝外，“恐夜间虎来，易于闯入”，居室内没有地桌，只有炕桌，吃饭，写字都用它。（満洲族の住宅は、昔、庭の中に影壁があり、神様を祀る「索倫竿」が立てられている。満洲族の伝統的住宅は、一般的には西，中，東の3つの部屋があり、玄関は南向き、西の間は西上屋と呼ばれ、中間の部屋は堂屋と呼ばれ、東の間は東下屋と呼ばれる。西上屋には南，西，北の三面に炕が設けられ、……彼らは西側の炕を尊い、南側の炕を大とし、北側の炕を小とする。南側の炕は年寄りが使い、北側の炕は若者が使う。西側の炕は祖先の位牌が置かれ、壁には先祖の神板が飾っている。炕の上には香案〔祭壇〕が設置され、人間は普段ここに寝ることができない。若者と婦女たちはここに座ることも許されず、年配者と婿だけがここに座っても構わない。満洲族の家の南・北・西の三面には「大きな窓があり」、上下二段に分けられる。組子は卍字あるいは工字型模様を使い、障子紙は外側に貼り付けられ、開閉栓も外側にあり、「虎が夜中に襲来したら、〔助け人は〕外から入りやすく」するためである。居室内には机がなく、炕卓〔オンドルの上に置く低い机〕しか置いていない。食事も、書くこともすべてこの炕卓の上でする）」⁽¹⁸⁾。1930-40年代時点での中国東北地方の満洲族の伝統的住宅の様式とその特徴について、『満洲の家』『満洲生活案内』などのガイド・ブックでの記述は、直感的で事例も溢れた紹介と言えよう。

モンゴル族（蒙古族）の民族的住居とその特徴

モンゴル族の民族的住宅である「包」（ゲル）は移動式の住居で、昔も現在も遊牧民中心に使われている。中国の東北地方にもモンゴル族の居住地があるため、「包」の構造や内部の平面図などは戦前と戦争中時代のガイド・ブックに何度も登場している。

(16) 『満洲の家』25頁。挿絵は同書26頁より引用。

(17) 現代研究者たちの研究成果としては、「万方数拠平台」などのデータベースで調べた限り、「論満族伝統民居文化」（于迪）、「伝統民居建築形式中的生態観——以遼寧垣仁満族伝統民居為例」（張迪ほか）、「満族・朝族・蒙族伝統民居居住形式的比較研究」（赫佳音）、「決定・適応・進化——遼東満族民居炕居空間演變」（汝軍紅ほか）などの研究論文がすでに発表されていることは分かる。

(18) 「満族伝統民居」（<http://www.haiyanggl.com/c20403.html>, 2013年12月18日）。

しかし、「包」の外観から家主の貧富・階級などが分かることは、当時の時代的特徴と言えよう。

「蒙古人の天幕は包と云ひ、その包により階級が弁別出来る。白は包を度々取りかへるからで、従つて富者である事が解る。貧者の包は長年同一のものを使用してゐるので自然その色は黒く汚れて居る。包の頂上を赤い絨毯で葺いてあるのは王様の住宅である」⁽¹⁹⁾。

折り畳んだ「包」は駱駝や牛の背に乗せて簡単に移動できる長所を持つ反面、保温性が悪く、中央暖房も無く、水道も無く、便所も共用で非水洗であるため、遊牧民の定住化にしたがって、現在半永久的な「包」や普通のアパートに取って代わりつつある。しかも、これは20世紀後半に入ってからの出来事ではなく、1930～40年代にも「又固定式蒙古包と支那系の平房と折衷した建築物もある」という⁽²⁰⁾。

オロチョン族 (Orochon, Oroqin, 鄂倫春族) の民族的住居とその特徴

オロチョン族の住居は「円錐形系民家」と呼ばれる特殊の形をする木造住宅で、「テント」という記述もあった。

「オロチョンのやうに狩猟を生業する北部僻地の少数民族の住家で、細長い丸太数十本を円錐系に組み立て、表面を獣皮、魚皮樹皮で覆つただけのものである、頂端に少し空間を残して煙出とするのは蒙古包と同様である。之にもアンペラや草で覆つた半固定式の家屋がある」⁽²¹⁾。「テントは白樺の丸太二三十本を直径二間高さ一丈〔筆者注：中国の旧式度量衡単位、約3メートル〕位の円錐形に組み立て、夏は樺の樹皮又は藁で掩ひ、冬は袍子（パオズ、ノロメシカ）の皮六七十枚と乾草とで包み更に圧えとして丸太若干をその上に立てかけるだけである」⁽²²⁾。残念ながら、筆者の手元にあるどのガイド・ブックにもこの「円錐形系民家」の写真またスケッチなどは掲載されていない。参考のために現代に復元されたオロチョン族住居の写真をつけた（図9）。



図9 復元されたオロチョン族の住居

家屋の中には、「正面の席は主人の席で、その上に祖先の神ヂアチダアレと云ふ狩猟の神や、馬の神、漢民族の娘々と云ふ女神等を祀つてある。しかし女は一切この神棚に接近することを許されぬ」⁽²³⁾。

そして、当時のオロチョン族の生活習慣についても、次のような紹介があった。

テントの中には、「中央の地面を少し掘炉とし、鉄製の五徳を据えその上に直径一尺五

(19) 『満洲生活案内』11頁。

(20) 『満洲生活案内』11頁。

(21) 『満洲生活案内』12頁。

(22) 『満洲の家』29頁。

(23) 『満洲の家』29頁。

寸乃至二尺の大きな鉄製の鍋を置き炊事をする。一つの鍋で肉も煮れば、飯も炊き、油あげもつくと云ふ具合は漢民族も蒙古民族も同じである」⁽²⁴⁾。

このオロチョン族の住居に関する描写は、現在の研究者による考証の結果とほぼ一致している。

「“斜仁柱”是鄂伦春人传统的居室，圆锥形，用4根顶端带杈的木杆交叉搭成支撑架，然后再搭上几十根木杆，围成圆锥体，外面或覆盖狍皮围子或覆盖桦皮围子。门上挂狍皮或柳条门帘。易于拆卸搭建。顶端留有空隙，以便里面生火时通风出烟，又可采光。南侧或东南留出一个让人出进的门。……（「斜仁柱」はオロチョン族の伝統的家屋である。円錐形を呈している。先端に木の股が付いている4本の木棒を交差させて支柱にし、更に数十本の木棒を円錐形に囲み、外側にノロ鹿の皮あるいは樺の樹皮を覆う。ドアにはノロ鹿の皮か柳の枝で作ったのれんを付け、組み立てと解体は簡単にできる。頂点には隙間を残し、家の中に火を焚くときの煙の出口になり、採光の入り口にもなる。南侧あるいは東南側に人間の出入り口を設ける。……）

“斜仁柱”的内部陈设也很简单，主要是铺位。铺位有两种，一种是地铺，即直接在地上铺上木头，干草，桦皮，狍皮等。另一种是床铺，即在地上立木桩，架起床。每个“斜仁柱”一般三面住人，一面是门，当中有一火堆取暖，上面吊一口小铁锅，以便煮肉做饭。（「斜仁柱」の内部設備はとてもシンプルで、寝床が中心となっている。寝床は二種類あり、「地鋪」とは地面に木材・乾草・樺の樹皮またはノロ鹿の皮を敷いたものである。「床鋪」とは地面に木棒の杭を立てて、その上にベッドを立てる。「斜仁柱」の中には門の一面を除けば、ほかの三面は人間が住む。真ん中に暖を取る焚き火があり、火の上に肉を煮たり、主食を作ったりする小さな鍋が吊されている。）

“斜仁柱”一字排列，门朝相同的方向开，因为“斜仁柱”正面是他们供奉神的地方。“斜仁住”内部朝门开的铺位叫“马路”，左右侧的铺子叫“奥路”。……“玛路”是供神的地方，只许男人坐卧，“奥路”是老年夫妇的席位，铺位里侧放着随时用的粮食，衣物。鄂伦春人为适应游牧生活之特点，家俱几乎都是轻巧耐用的桦皮制品，主要有碗，筷，桶，针线盒等，并配上各种颜色图案和花纹。（大勢の「斜仁柱」は長蛇の列をなして、門が同じ方向に開かれている。「斜仁柱」の正面は彼らが神様を祀る場所だからである。「斜仁柱」の中に門に向いている寝床は「馬路」と呼ばれ、左右両側の寝床は「奥路」と呼ばれる。……「マ^マ路」は神様を祀る場所で、男だけが座ったり寝たりすることができる。「奥路」はお年寄り夫婦の場所である。寝床の裏側には普段必要な食料や衣服が収納されている。遊牧生活に適応するため、オロチョン族の家具と道具などはほとんど軽くて丈夫な樺の皮でできている。主に茶碗・箸・桶・裁縫箱などがある。さまざまな図案と色で装飾されている。）」⁽²⁵⁾

(24) 『満洲の家』29頁。

(25) 「一元一国学網」(<http://www.yiyuanyi.org/guoxue/200904/5973.html>, 2013年12月19日)。

三、伝統的装飾物と看板

住居に附設する装飾物

・家堂と督財府

「家堂」とは、「中流以上の家には家堂と云ふ祖先を祀る祭壇」であり、「富豪の邸宅になると邸内に立派な祠廟を建ててあるところもある。貧家でも正月には特に壇を設け、祖先の像や家系譜を懸けて祖先を祀るのである。家系譜は懸軸になつて『祖徳宗功』などの文字を中心に『慈孝傳家箕裘很緒、歳時服本俎豆薦親』⁽²⁶⁾などと書いた聯を貼って、饅頭や各種の料理、団子、栗、落花生、梨、柿、棗等の供物を供える。この供物は日本の『かち栗』『くり合ひ箸』『日出度』『数の子』等の様に字の音や物の形から来た縁起ものである。『棗は早』に通じ『早く子を産む』意味で、くりは立身の立つに通じ、落花生も子を産むの『生』をとつたもので、富貴長寿子孫の繁盛を意味するものである。』⁽²⁷⁾

ここで紹介された「家系譜」は中国の「族譜」や「家譜」を指していると考えられる。昔の中国では一族の祖先を祀る家祠（即ちここでの「家堂」）に納められ、氏族で大きなイベントが開催される時や新しい家族の誕生などを祝う時に取り出され、加筆されると言われている。家祠の「供品（供え物）」については、地域によってその中身は大部違うと言われている。旧暦の十二月八日に団子、栗、落花生、棗等と一緒に粥に入れて「臘八粥」を食べる慣習は現在でも存在しているが、家祠に供え物として供えることは、地域的な慣習なのかも知れない。

「督財府」とは「財神（福の神、金儲けの神様）」の別称で、「日本の恵比須大黒やお稲荷様にあたるもので、道教の玄神真君や関帝、比干の像を描いた軸を懸け、その左右に聯をかけ、供物は酒や精進料理などを供え、錫製の燭台に赤い蠟燭を点し、香炉に香を焚くのである。この督財府は一寸した商家にはかならずあり、料理屋等の水商売は日本の稲荷様のやうに矢張り之を祀つてある。』⁽²⁸⁾

戦後、特に中華人民共和国の建国後、迷信行為の一掃などが繰り返され行われたため、「督財府」などは現在の中国に、一部の都市に地名として残された以外、ほとんど見かけることができない。近年、経済活動の活発と迷信行為の台頭によって「財神」と呼ばれた趙公元帥の像やイラストなどが再び現れてきたが、「督財府」そのものは遂に「復活」に至らなかった。

・春聯と対聯

「春聯」とは旧正月の時、中国のほとんどの家や店舗が玄関の柱や入り口の框に張り出した飾りの一種で、めでたい文句を赤い紙に書いて、新春の到来を祝うものである。旧正月前後に限らず、一年中玄関や客間に飾る鑑賞するものもあり、「対聯」などと呼ばれる。対聯は季節的なものではないので、掛け軸や木の板に刻んだ額の形のものが多い。「春聯」と「対聯」は現在の中国でも伝わっており、現存する重要な伝統的文化の一つである。

1930-40年代の日本人観光客にとって、「春聯」と「対聯」は言うまでもなく、素朴な町

(26) ここでの「箕裘」は「父祖の業」の意味で、その後ろに続く動詞句はよく「克紹」「紹統」などが使われる。「很」という現代語は古文に使われていなかったため、写し間違えた可能性があると思われる。

(27) 『満洲の家』14頁。

(28) 『満洲の家』14頁。

や家々の玄関を飾る鮮やかな異文化に含まれていた。「大門や家屋の入り口の左右の柱に春聯が貼つてある。春聯は正月に喜びの色である紅色の紙に、種々様々の目出たい文句を書いたもので、富家の門に見れば愈富貴を思ひ貧家の門に見れば風雅を偲ばれる。前後二句を以て環境状態感想を表はし、全句又は各句各字が互ひに相對し、韻を踏み、関連したもので、その構想の即妙、表現の雅致、実によい句がある。支那人は元來二つの数を愛し何かにつけ兩々相對するを良しとしてゐる」⁽²⁹⁾。「繁華な市街地では左程目立たぬけれど、人通りの少ないものさびた駅場や、僻村で、燻びた農家の柱に目さむるばかりの紅い春聯を見るのは、得も言へぬ深い味はひのあるものである。又正月に貼つた春聯が日を過ぎて、紅い紙の色もあせ風塵を浴びてゐるのも旅愁をそゝるものである」⁽³⁰⁾。

『満洲の家』には、あの時代の中国東北地方に見かけた春聯をいくつか紹介し、「天地無私為善自然護福 聖賢有教修身可以齊家」という勸善齊家の春聯を「風雅を愛する主の心も偲ばれるもの」として賞賛した⁽³¹⁾。その紹介された春聯の中に、「万民有慶、五族協和、百福駢増 一天淑氣、万里恩波、楊柳春風」など植民地的な雰囲気を感じさせたものもあった⁽³²⁾。

「對聯」の代表例として、『満洲の家』の著者は、いくつかの商家を選び、その玄関に飾つた對聯を紹介した。たとえば、「甕畔香風酣眠吏部 樓頭春良醉神仙」（酒屋）、「其一樽酒 相見万里人 且住為佳」（旅館）、「一紙音書傳万里 四百消息送千家 代遞好音」（郵便局）、「至誠不息 厚德無疆 敬神如在」（仏堂）、「掌万民之福沢普沾吉慶 通天下之財源永錫豊盈」（財神廟）、「頗有幾分錢、你也求、我也求、給誰是好 不做半点事、朝亦拜、夕亦拜、教我為難」（財神廟）などであった⁽³³⁾。これらの對聯は現在、すでに一般民衆の視野から消えている。

・窓の構造と飾り

中国の伝統的家屋の窓は基本的には全部木造で、蝶番などの開閉器具は使用されないが、具体的な形と様式などは各地域にそれぞれの特徴が見られる。『満洲の家』の著者の観察によれば、1930～40年代の中国東北地方では、「出入口の戸は何れも蝶番を使用しないことも漢民族住宅の特徴と云ひ得る。……各室には東又は南向きの壁に窓があり、これに紙障子を嵌める、上下二枚の障子を葺戸の様にし所謂上支下採式で、上部のものは内に突揚げ下部のものは引上げて取外す装置である。夏は蠅除けのため蚊帳様の布を張るのは中流以上で、一般の住宅は蠅地獄を現出する。」⁽³⁴⁾

中国の伝統式住宅にとって、窓の障子と組子は単に採光のための空間だけではなく、部屋の風情を醸し出す道具の一つでもあり、家庭のステータスを表すシンボルでもある。そのため、「裕福な家では特にこの障子や欄間の組子に金を惜しまず風雅なものを造らせ」⁽³⁵⁾、多種多様な窓の障子と組子のデザインが生まれた。『満洲の家』の中にも「千差万別、種々

(29) 『満洲の家』19頁。

(30) 同上。

(31) 『満洲の家』21頁。

(32) 同上。

(33) 『満洲の家』21頁。

(34) 『満洲の家』16～17頁。

(35) 『満洲の家』17頁。挿絵は同書16頁より引用。

様々」の表現を使って東北地方で見かけた13種のデザインが挿絵で紹介されている。(図10)

窓の障子と組子の地方的な特徴について、『満洲の家』の著者も鋭い観察力を発揮している。「満洲の障子で面白いのは、支那の他地方では障子の組子のある方を外面にするに反して、組子を内にするのが特に吉林省に多い。これは黄塵の多い満洲は土砂が組子にたまって汚くなり、又雪が多いから、糊が外れるなどの理由による」⁽³⁶⁾という。この特徴に関する説明は、確かに当該地域の天候条件に合致している。

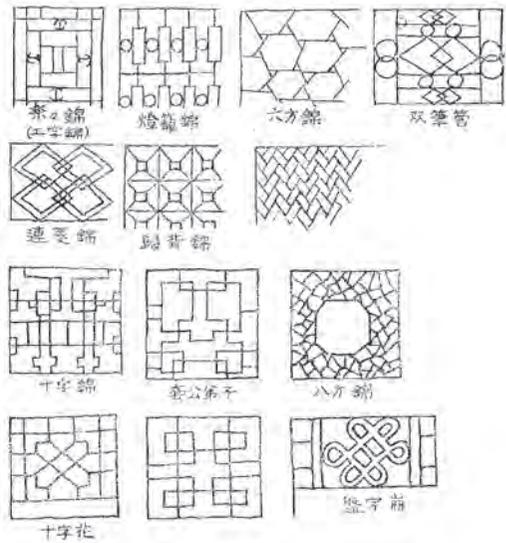


図10 窓の障子と組子の模様

さまざまな看板

現在の中国では街の繁華街に出ると、店の看板などは世界のどこにもあるよう

にネオンやLED灯飾が主流となっており、明るく、鮮やかになってきたが、昔の中国では、「招牌」「幌子」と呼ばれる軒先や玄関の上に掛ける看板が主流であった。知識人を相手にする書店・古本屋・文房具店・骨董店などの「招牌」は漢字を多用するが、文盲が大半を占める一般庶民を相手にする日常生活に密着する店の場合、記号・マーク・絵などを使って、それぞれの店の業務内容を一目で分かるような工夫が施されている。

「満洲に遊ぶ旅行者が『満人』街を歩くとき、一番その目を楽しますものはこの招牌である。あの膏薬をのべた形を釣り下げた薬店。赤い板に金文字で『當』の字を書いた質屋。日暮れの街に吹く風に揺れてゐる支那料理屋の幌子。暮れ始めた花街のさんざめきを聞きながら仰ぐ中空に、ほのかに赤く点される支那風呂の灯は旅愁を感じせしむるもの、一つであらう」⁽³⁷⁾。

招牌を作る材料は木材、布、金属などがメインとなり、電気がほとんど普及されていなかった当時では、「形」「色」「デザイン」などの面で勝負に賭けるしかなかった。

「招牌の中に、『満人』達に喜ばれる蝙蝠、龍、麒麟、桃、瓢、双魚、柘榴等を図案化したものも多い。紅色は吉祥のシンボルである。『発財』（金儲け）を願ふ商店の何処かにこれ等の画を見るであらう。篩の様なもの、下に、細かくきざんだ五色の紙を貼つてあるのは飲食店、錫製の酒壺（支那銚子）に赤い布を釣つてあるのは酒屋。布疋（呉服）店の軒には丈余の赤い布の両側をぎざぎざに切り込んだものを掛ける。その掛け竿には桃か龍の頭をこさえてある。又薬屋の瓢箪、柘榴は多産のシムボルとして、利殖と結ぶつけているのは、この国民の豊かな信仰を表象してゐるではないか」⁽³⁸⁾。

(36) 『満洲の家』17頁。

(37) 『満洲の家』22頁。

(38) 『満洲の家』22～23頁。

第九図



図11 さまざまな招牌 その一

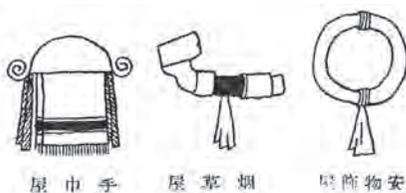


図13 さまざまな招牌 その三

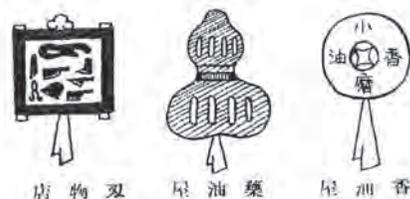


図14 さまざまな招牌 その四

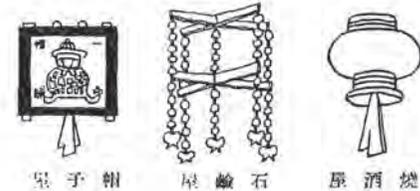


図15 さまざまな招牌 その五



図12 さまざまな招牌 その二



図16 さまざまな招牌 その六

多くのガイド・ブックには様々な招牌や幌子の模様・図案を掲載されている。図11～16まではあくまでその一部である⁽³⁹⁾。その商売の中で、多少の説明が必要なものには、「棉花屋」は綿打ち屋、「粉屋」は小麦粉などの製粉専門店、「毛巾屋」はタオル専門店、「香油屋」はごま油の店、「成衣」店は既製服を販売する専門店である。これらの店はほとんど現存していないので、その看板と共に、歴史の記憶の中に遺された。

※ ※ ※ ※ ※

上述したガイド・ブックの紹介を通じて、すでに時代の変遷によって淘汰され、あるいはライフ・スタイルの変化によって消失していった生活慣習など民衆生活史の一部は、歴

(39) 図11は『満洲の家』20頁より引用。図12～16は『満洲旅行の栞』より引用。

史の記憶としてある程度まで再現することができた。

これらの描写の信憑性について、1970～80年代にもなお現役として存在していた「炕」に関する『満洲の家』の紹介を例として見れば理解できる。

「鍋台（竈）で焚く火の余熱はそのまゝ、発散することなく壁を隔てて炕（温突）の下に入る。……（中略）

鍋台又は焚口を起点として、数回屈折した溝を築いて煙の通路をつくつてある。通路の幅はその上を蓋ふ煉瓦の長さと同じである。所要の高さに積み上げられた通路の上に、蓋ひ煉瓦を載せて畳み、更にこの上に煙が洩れない様に粘土を塗るのである。高級のものは更にこの上に漆喰で上塗りする。

炕の上には葦で編んだアムベラを敷く、（朝鮮人は滋紙を貼る）良い家庭ではアンペラの上に絨氈を敷いてあるところもある。普通のところはフェルトの様な毛氈か蒲団を敷きその上に座臥する。

農家ではそんな贅沢なものではなく、来客があつても紺染めの粗布で造つた薄い煎餅蒲団を敷くのが関の山である。」⁽⁴⁰⁾

炕（オンドル）は現在でも中国東北部の一部の農村地域で見かけることはある。消えた歴史の記憶ではないが、経済力の異なった家庭および民族の違いで生じた「炕」とその上の敷物の違いは現在と昔は大きく変わった。『満洲の家』での紹介は、まさに1930～40年代という特定の時点での歴史的記憶と言えよう。

日本語観光ガイド・ブックの中に、中国側が作った社会施設に対して紹介と評価を加えたケースもある。例えば、奉天（瀋陽）観光名勝に関する紹介の中に、同善堂という社会慈善事業施設も登場していた。この施設に対して、『満洲の観光バス案内』の著者は、「（同善堂は）光緒七年当時天然痘が流行を極めた際、後に日清戦役の猛将、左宝貴氏が私財を投じて天然痘予防、育児保護、貧民救済のため、開設したのに始まり、特筆すべきは、救生門（捨て児を受取る窓）済良所（逃避し来れる娼婦を収容する所）等で、世界各国にも類なきものと謂はれてゐます」と説明し、同善堂の救済事業を称え、日清戦争時の中国抗日名将左宝貴の慈善共済活動をも高く評価した。公平な見地からの紹介文と言えよう⁽⁴¹⁾。

もちろん、中国侵略戦争期間中に発行されたこれらの旅行ガイド・ブックの中に、侵略戦争や侵略行為への批判を避けて、もっぱら観光の楽しみを宣伝するものもあり、侵略行為を美化する文言を本文の中に埋め込んだものもあった。例えば、松宮吉郎著『新京』の中には「新京（長春）」の都市計画の素晴らしさを称えたと同時に、「昭和七年三月九日、新京は三千万民衆が無限の楽土とする新国家の首都として、名も「長春」より「新京」と改め、中外に向かつてその独立建国の宣言が声明された」と傀儡国家だった「満洲国」を「皇道楽土」のような存在であると宣伝した⁽⁴²⁾。そして、奉天鉄道局の編著による『新京』は、新京にある日本陸軍の関東軍司令部と日露戦争の日本軍戦死者を祀る「忠霊塔」などを観光名勝に入れて、「満蒙平和確保の号令をこゝから発せられる」と関東軍を平和的な軍隊として賞賛した⁽⁴³⁾。これらの表現は侵略戦争そのものと同様に歴史のマイナス遺産

(40) 『満洲の家』12頁。

(41) 伊與三郎『満洲の観光バス案内』7頁。

(42) 松宮吉郎『新京』3頁。

(43) 奉天鉄道局『新京』5頁。

の一部であり、批判的視点で理解すべきことは言うまでもない。

このような案内書・指南書などのガイド・ブックの編集目的について、『満洲生活案内』の著者は、「はしがき」の中に、「満州国に於ける一般民衆の日常生活は各方面に於て改善すべき多くのものを有してゐるが、その反面数十年、数百年間に自然に培れた彼等の生活様式には日本人として学ぶべきものがある。即ち三十年に亘る日本人の満洲発達史を顧みるときこの『風土順化』の研究不足は満洲の名に不健康地なる汚名を附したとさへ云ひ得るのである。本書は満洲に於ける日本人の激増に伴つて問題視されつゝある『日本人は満洲の風土を如何に征服し、如何に適應して移植の根を張るべきか』について、その実験を語り満洲生活を解説することを企図したもので」と、はっきりと認めた⁽⁴⁴⁾。つまり、「満洲」に対する「研究不足」を認め、その「満洲の風土を如何に征服し、如何に適應して移植の根を張るべきか」を研究するために、編纂されたものがほとんどだったということである。

(44) 『満洲生活案内』「はしがき」1頁。

〔抄 録〕

1930～40年代、日本語で出版された「満洲」旅行関連のガイド・ブックは数が多く、同じ出版元からは同じタイトルで数年間隔で新しいバージョンを出版され続けたケースもあり、当時の都市変遷・生活環境の変化などを把握するためには、参考価値が高い。本論文は主に、藤田勘一『観光叢書第9輯 満洲の家』、松宮吉郎『新京』、満洲事情案内所編『満洲生活案内』、『満洲旅行の栞 昭和十年版』など数種類の資料に基づいて、砲台・倉庫など「歴史的・地域的な建造物」、満洲族・モンゴル族・オロチョン族など「少数民族の住居とその特徴」、家堂・督財府など「住居に附設する装飾物」とさまざまな「看板」を通じて、征服者としての日本人観光客という異民族の目に残され・記録された歴史的記憶の実像とその信憑性について、整理・検討を行った。